
異世界召喚？嫁を連れ戻せ！

春夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界召喚？嫁を連れ戻せ！

【Nコード】

N4958S

【作者名】

春夕

【あらすじ】

異世界に召喚された嫁を旦那が必死で助けるお話。

主人公は何の特殊能力も持たないちよつと洞察力と勘が鋭い男性神風恭一。彼は果たして奥さんを異世界から助け出すことが出来るのか！？

第一話

真姫との通話を終了したおれは、洗面所へ……。顔を洗って、歯を磨いて、身だしなみを整える。

「はあ〜〜〜」

気分が重いねこりや……。

真姫を呼び戻すのに必要な事柄。

そのまず一つ目は方法だ。

ある意味これが最大の難関である。

だが……これに関しては、その道の専門家に相談してみるしかない。

確かに、真姫と一緒に超常系のトラブルに巻き込まれたりもしたが、基本的なおれは一般人だ。

神社の宮司をしているとはいっても、そんな超常現象やオカルトの知識はないし、トンでも能力も持ってない。

お払い程度の知識ならあるが、魔法みたいな現実に必要ない知識に関してはゼロである。

まあ、多少のライトノベル知識ならあるが……。そんな実際に役立つかどうか分からん知識で下手なことは出来ないし。

そんなおれに、彼女を呼び戻す方法などわかるわけがない。

「……気は進まないけど、あの変人を頼るしかないか……」

〈第一話〉

彼女の友人にして、稀代の変人である人物に電話をかけるため携帯を手取る。電話を掛けるのは久しぶりだが、それ以上にまたあいつの長い話につき合わされるかと思うと少々辟易しながら通話ボタンを押す。しばらくの呼び出し音の後に、「申し訳ありませんがお繋ぎ出来ません」とか言われてしまいましたよ。

「……着信拒否ってどういうことだ」

さすがのこの事態は予想していなかった。

今おれが電話をかけた相手は、ひのかみ日野神よしいち陽一という男だ。自称日本一の魔術師だそうで、俺の嫁がオカルト方面のトラブルに巻き込まれた時に知り合った。ちなみに嫁と陽一、俺は同じ高校に通っていた級友だ。トラブルにあったのは高校二年のときだ。それ以来何かと嫁のトラブルに巻き込まれて災難に遭ってきた可愛そうな男でもある。その時の話を思い出そうとして、思考が横道にそれていることに気づく。

思考を元に戻して、あいつが電話に出ない理由を考える。

「まさか……あいつにまでなんかあったのか？」と思っただが、即座に否定した。そんなことあるわけがない。

あいつは学生るときから、成績優秀・眉目秀麗・文武両道の言葉を地で行く奴だった。そんなあいつが、嫁とは別に同時に何か厄介ごとに巻き込まれて連絡が取れないなんてことはありえない。アイツ単体なら、トラブルに首を突っ込むことすらないんだから。

「たぶん……」

その先を続ける前に電話が鳴った。なんとともタイミングの良いことだ。

「何で着信拒否どころ」

「まず僕だと一発で分かった理由が聞きたいな？ 表示の番号は私の電話番号とは違うだろう？」

まあ、日野神陽一氏本人からの電話であるというのは、これまでの経験則から導き出したただけだ。

「簡単だよ。お前が電話に出れない何か事情を持っていたとしても俺から電話することなんぞ滅多にないし、お前が電話を返してくるのは分かりきってた。このタイミングで見知らぬ番号からの電話なら、ほぼ間違いなくお前だろうと推測できるさ。それに、お前のことだからタイミングを計っていたか嫁がいなくなったことに気づいてでもいたんだろう？」

なんだか小さくため息みたいなものが聞こえたが……。どうやら肯定のため息らしい。なぜ、呆れられなきゃならんのかは、おれには分からん。

「相変わらず推察力と勘は並外れているねえ。とりあえず、なにがあったかは聞いても良いかな？真樹がいなくなっていることは知ってるよ」

それを聞いた瞬間に、頭に血が上った。すぐそばの壁をぶん殴る。何の躊躇もなく全力で拳を壁に叩きつける。そこに日野神陽一がいるかのように、嫉妬と憎しみを込めて。

「お前が嫁を監視してるのは知ってる。ただ、おれがそれを快く思っていないことも知っているよな」

自然と声が低くなる。どうしてもここだけは納得できない。あいつが善意でおれたちを護衛してくれているのは知っている。だが、同時に護衛のための監視をおれは非常に不快に思っている。

「知っている。今はそれよりも、君たちが巻き込まれている現象を解明することのほうが重要だと思う。君が私のことを嫌っているのは知っている。しかし、君もそう思っているからこそ、電話をかけたんだらう？」

陽一の言葉は至極もつともで、おれ自身もそうしようと思っただけで話をしたんだ。それなのにおれときたら……。

「すまない。いま少し頭を落ち着ける。十秒待ってくれ」

そういうと、陽一の返事を待たずに携帯電話を置き、深呼吸をする。嫉妬と怒りでいっぱい思考を深呼吸をすることに、少しずつ落ち着けていく。きっかり十秒それを繰り返して、携帯電話を取った。

「ありがとう。落ち着いた。今から話す」

「ああ、頼む。なるべく分かっていることを事細かに説明してくれ。そうして話した。嫁が異世界に召喚したと電話してきたこと。そこで勇者にされそうなどの情報をなるべくこと事細かに。」

一通り説明が終わると、陽一から意外な言葉が出てきた。彼の性

格から考えてそれを簡単に言うことはまずないと思っていた言葉だ。「……今までの話を聞いて、その結果から推測するに、こちらから彼女を連れ戻すのは至難の業だと思う」

陽一 の言葉に、また頭に血が上りかけるが、何とか耐える。陽一 相手だとどうしても怒りの沸点が低くなってしまっのが問題だ……。 「その根拠は？ おれとしては一刻も早く嫁を連れ戻したいんだ。 そのためには何でもするさ」

内心の怒りを抑えながら、陽一 の反応を窺う。昔なら、この嫉妬心について悩んだこともあったが、今は面倒なので考えるのはやめている。

「それはね、彼女の位置情報を特定する方法がないことと、その世界が異世界ならば僕たちがいる世界と法則が違うためにこちらの魔術が彼女がいる世界に届かない可能性があるからだ」

それから、少し詳しい説明をされたのだが、専門用語が多すぎて細かいところはやはり分からなかった。だが、大筋で言いたいことは分かった。

「つまりは、嫁の拉致された世界の魔術がどんなものか知って、その世界とこちらの世界の法則に反しない魔術でなければ、彼女を呼び戻すことはできないってことか」

無言で肯く陽一。なんとというか、最悪だな。そういえば……。 「前回、アイツが異世界に飛ばされたときはどうだったんだ？」

こいつは数少ない、オカルト現象を解説してくれる人物だ。それに、真姫もこいつを頼りにしているらしい。ちょっと悔しいが、前回のときもこいつに手伝ってもらったと言っていた。それを今思い出したのだ。

「前回のときは、異世界に行ったとは言っても内容が違う。前回のとき、彼女はその世界そのものを統括する存在に呼び出されたんだ。元々、必ず帰ってこれるようになっていた。今回のケースとは全然違う」

その世界そのものを統括する存在？それはつまり

「神様に呼び出されて、その世界に行っただってことか」

「そういうことだね……もしかしたら、彼女はもつと簡単に呼び戻せるかも……」

いきなりの前言撤回に、おれが目を丸くしていると、電話口からおかしな音が流れてきた。これでもしかして、G線上のアリア？

「何でバツクでクラシックが流れてるんだ？」

「……あまり気にしないでくれ。事情は理解した。この後、合流できるか？」

相変わらず自分勝手な奴だ。まあ、それよりも実際に合流して説明してもらいながら、策を考え他方が良いだろう。ここはさっさと合流しておくか。

「大丈夫だ。お前のほうは大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だ。では三時間後に家に来てくれ。それまでには戻れるはずだ」

そう言うや否や、電話が切れた。一体何やってんだあいつは？

「これで、とりあえず一歩前進か……」

何とかして早く嫁を連れ戻さないと……。恐ろしいことが起こる。破壊の嵐、崩壊の竜巻、魔界の神様、人外の武神などなどの渾名を思い出してぞつとする。

彼女の周囲に起こるトラブルは、とにかく破滅的だ。破壊・崩壊・不可思議・奇怪等等。嫁はそれらのトラブルの中心にいて、必ず周囲を壊滅させてきたといっても過言ではない。

なるべくなら、今回は異世界で嫁が破壊神などと呼ばれないように祈りながら、ゆっくり陽一を待つことにした。今の段階では情報が少なすぎる。それに午前中から動けるのであれば、午後には何か動がとれるかもしれない。

神社の境内を箒で掃く。仕事は休みにしたが、これは仕事ではなく毎朝の日課だ。事務所は開けないが、それでも境内は綺麗にしておきたいというのもある。

アイツをしつかり迎えてやるために、おれは全身全霊を賭けるこ

とをこの神社の祭神に誓うことにした。

「やっぱり、自分のところで祭っている神様をお願いするのが筋だよな」

なんて呟きながら、祝詞をあげる。まあ、曲がりなりにも宮司なので、祝詞ぐらいは上げられる。これをあげられるようになるまで、嫁にどれだけ扱かれたか……。

やめよう。思い出したら涙出てきた。一週間飯抜きで祝詞とかドンドク鬼嫁だよ……。

「そんなことだから、おぬしはいつまで経っても悶着を起こすのよ」

いきなりお声が掛かったが気にしてはいけない。この神社には本当に神様がいらっしゃるだけなのですよ。

「それにしても下手糞な祝詞じゃな。いつまで経っても上達せんお主の望みはかなえるには少々厄介じゃぞ？」

なんとというか、この神社の神様は神話の時代の昔に、大変な悪さをしてこの神社のあった土地に封じられたらしい。それ以来、この神社の祭神としてここにいるらしい。真姫からの受け売りなので、実際のところどうなのかは知らない。それにこの神様、封じられているお蔭でなんの力も発揮できない。封印がなければ相当強い神様らしいのだが……。

「……確かにわしは封じられた身じゃ。しかし、知識と感覚は神のままじゃぞ？お主の友人と一緒に策を考えてやろうではないか！」
目を輝かせる神様を無視して祝詞を上げ続ける。もちろん、おれが祝詞を上げているのはこの神様ではない。こいつを封印している神様のほうだ。その名も鹿茸津姫だ。まあ、この神様は別名のほうが有名かな？木花之佐久夜毘売って別名の神様だ。

「あいつに祈ってもどうしようもなかるう。あやつは動けんよ。わしを封じている限りわな」

祝詞を上げ神様の我俣を無視しつつ、なんとかがんばれそうだなと思えた。

第一話（後書き）

さてさて、プロローグをいきなり間違っ
て短編で上げてしまいま
したo r t

とりあえずここからお話が始まります。主人公は奥さんを助け出すことが出来るのか！？そして、変人は役に立つのか！？この先を乞うご期待……あんまり期待しすぎないでいただけると幸いです……ちよつと調子に乗りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4958s/>

異世界召喚？嫁を連れ戻せ！

2011年4月19日18時25分発行